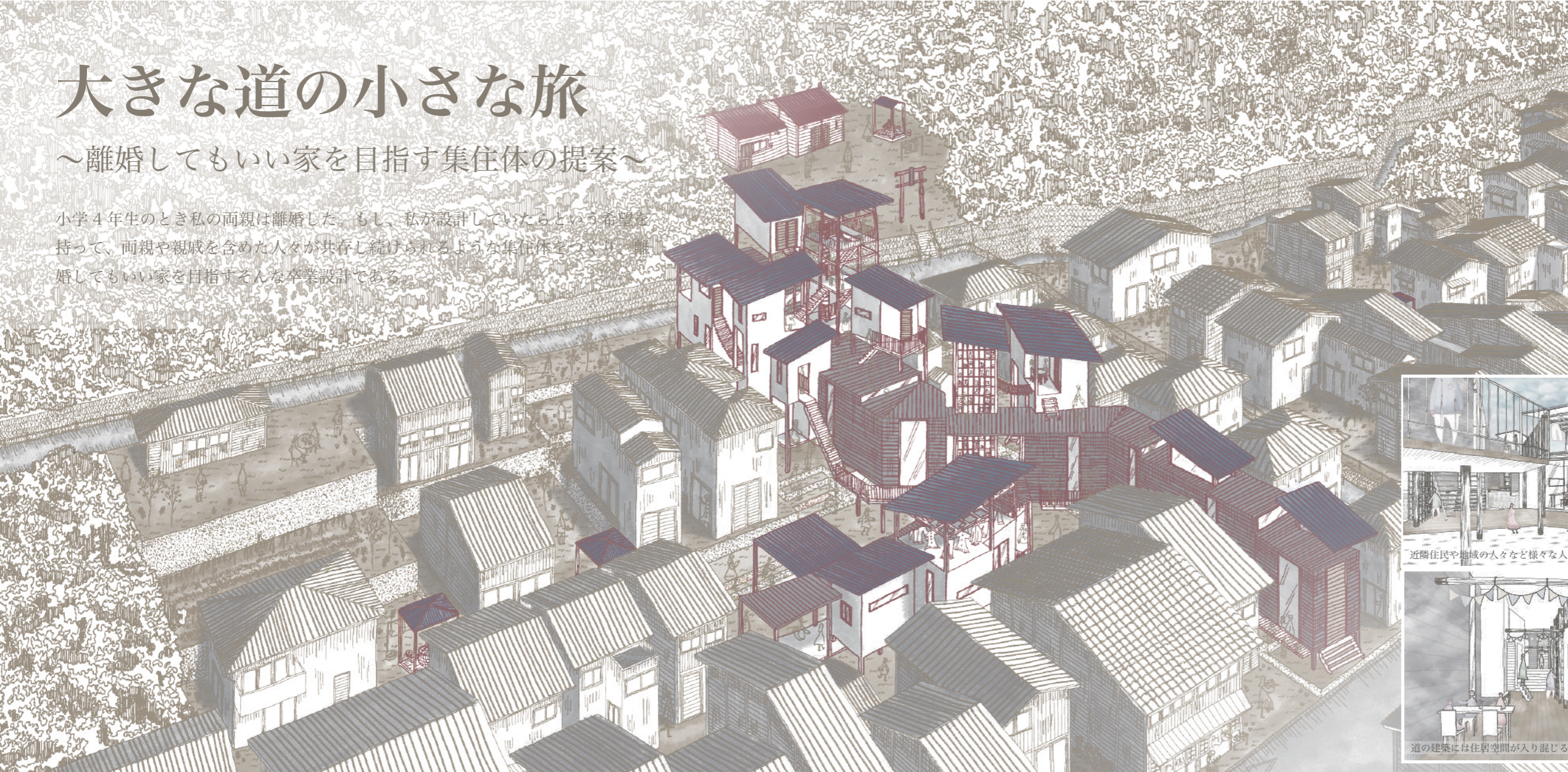


大きな道の小さな旅

～離婚してもいい家を目指す集住体の提案～

小学4年生のとき私の両親は離婚した。もし、私が設計していたらという希望を持って、両親や親戚を含めた人々が共存し続けられるような集住体をつくり、離婚してもいい家を目指すそんな卒業設計である。



Concept: 家族という枠にゆとりをつくる

共有のかたち

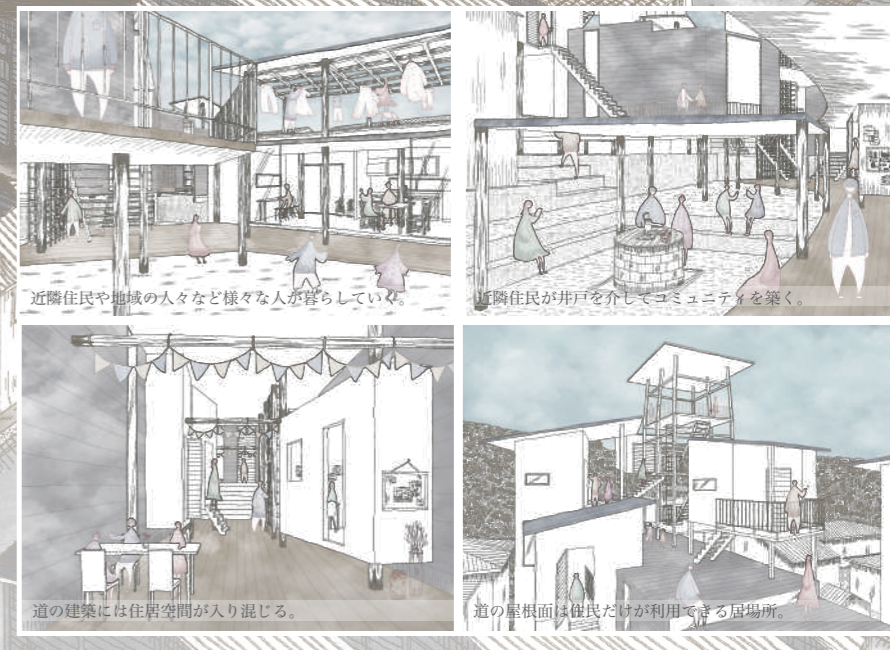
日常の共有
料理 記念日 歳暮
日常共有から他者を受け入れるための交流

出来事や変化の共有
成長 農作
マンネリ化を防ぐための重要な交流

記念日などの祝い事のときには集まり、喧嘩したときには離れて暮らす

ネガティブの共有
悩み 喧嘩
ネガティブ要素の共有を前提に暮らす

そのようなゆりのある共同体をつくっていく



00 研究背景 実体験から生み出す研究プロセス



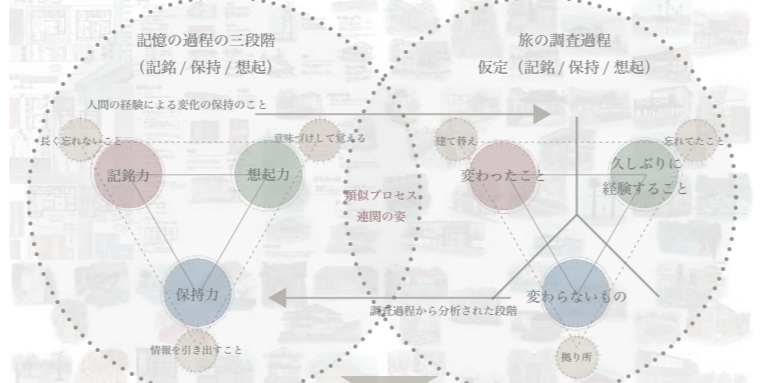
まち一帯が家族として共存し続けられるような集住へ
小学校四年のとき私の両親は離婚した。離婚を生んだ家を糧に。もし、私が設計していたらという希望を持って、両親や親戚を含めた人々が共存する集住体があることで、離婚を新たな人生の始まりとして捉えられる家を目指すそんな卒業設計である。

01 調査 両親や親戚へのヒアリング



家族という共同体の結節点を見つけるべく、離婚した家一軒と離婚していない家二軒の合計三軒の家庭を対象に調査を実施した。
この調査を通じて、住空間の特徴や家族間のつながりの深さに加え、それぞれの家庭における日常生活での結節点や課題を明らかにした。

02 仮説 調査過程から導いた記憶の三段階



それぞれの家庭が旅について変わったことを「記録」し変わらないものは「保持」していく。そして、かつての旅を再び「想起」という記憶の三段階と同じプロセスで旅への期待を満たしていた。そこで、記憶の三段階を利用することで人々は旅に対して長期的に期待を膨らませることができると考えた。

03 敷地選定 大名行列の宿場町 / 静岡県蒲原

大名行列でできた、住民だけが知る抜け道を利用する

敷地分析すると裏庭には井戸の連続性があった

せどのみちを着目し分析すると小さな井戸を起点に展開されていたことがわかった。そのため井戸周りの構築プロセスも踏まえ考えていくことで、近隣の既存住居との共同体をつくり出せると考えた。

開放された裏庭 開放された土間

井戸 外部の道 内部の道 井戸のつながり

誰がいつ来ても住めるような住居空間をつくる

集落的に配置した住空間は近隣住民も住むことができる

住居を匿名化し、生活の変化によって住む場所を移動できる。

記憶の三段階で今後の暮らしはきっと豊かなまま長く持続していくと考えた。

04 建築提案 共同体にゆとりをつくる建築

本提案計画敷地は、旧東海道に面したお休み処やせどのみちの井戸のある住宅地である。記憶の三段階とせどのみち共同体を人々の結節点として利用し、まち一帯が集住体となるような共同体を再考する。

敷地情報 旧東海道のお休み処と神社の参道に挟まれた敷地

本提案計画敷地は、旧東海道に面したお休み処やせどのみちの井戸のある住宅地である。本提案によって生まれたゆとりある共同体が家族という枠を緩めて支え合うことで、暮らしを次のステップへと進める小さな旅の暮らしを計画していく。ここでは外部の人々が家族として生活でき、それを非日常として感じることで、気分転換を備えたまち一帯の家族が形成されていく。

05 設計手法-1 家のように道を歩き道のように家で旅する

人々が通れるレベル差をつくる

井戸にみんなの庭をつくる

床レベルを持ち上げ角度を振る

誰がいつ来ても住めるような住居空間をつくる

集落的に配置した住空間は近隣住民も住むことができる

住居を匿名化し、生活の変化によって住む場所を移動できる。

記憶の三段階で今後の暮らしはきっと豊かなまま長く持続していくと考えた。

06 設計手法-2 道の建築プログラム

住空間は道に対して角度を振り、隠れ家のような居場所を生む。集会場所である展望台は原初の家族にとって地に足がついた故郷のような居場所となる。

断面プランでは人々のつながりにレールを敷くように道の建築を介入させ利用される想定場面からかわりしろをつくり断面をつないだ。

住居空間テーマ 住む場所が離れても気軽に帰って来れる距離感をつくる

柔軟性を持つ新たな共同体

本提案の集住では敷地の中で離れて暮らすことを可能にした。そこで、離れて住みながらもいつでも帰って来れるような距離感をつくるのが重要なテーマだと考えた。